



Title	未来共生プラクティカルワークの現場から
Author(s)	榎井, 縁; 石塚, 裕子
Citation	未来共生学. 2017, 4, p. 245-250
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60728
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

未来共生プラクティカルワークの現場から

榎井 縁

大阪大学未来戦略機構第五部門特任准教授

石塚 裕子

大阪大学未来戦略機構第五部門特任助教

1. 現場から学ぶこと

大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラム（以下、未来共生プログラムと略称）は、2012年度に大阪大学に設置され、「多様で異なる背景や属性を有する人びとが互いを高め合い、共通の未来に向けた斬新な共生モデルを具体的に草案・実施できる知識・技能・態度・行動力を備えた実践家・研究者」である「未来共生イノベーター」を輩出することを目的にしており、2016年度で第4期目にあたる学生を受け入れている。

履修生が身につけるべき知識や能力やものごとに対する態度や行動力は、従来の大学で教育研究の対象となってきた既成の学問の枠組みからはみでるもので、未来共生プログラムに関わる大阪大学の教員は、プログラムを運営しつつ、「未来共生」「未来共生学」とは何かという根源的な問いに答えること、「走りながら考えること」を要求されている（栗本 2014: 4）。

志水（2014）は、未来共生学の構想を進めるうえで三つの領域・アスペクトを提示している。1) 共生とは何かを追求する「共生のフィロソフィー」、2) 共生に向けての社会の現実を理解する「共生のサイエンス」、3) 共生を実現するための手立てを考える「共生のアート」である。志水は東洋大学の竹村らが唱えた「共生学」を引きながら、それぞれが「理論」「現状分析の分野」「問題解決の分野」にあたると説明している。そのうちの「理論」や「現状分析の分野」は大学という研

究の世界において構築されたものが曲がりなりにもあるといえる。

しかし、「問題解決の分野」を示すアートは、〈いま〉〈ここ〉にまつわる直感や感覚、情緒的で属人的な手法や技といったもので、現実社会の中の「生き物」(現場)としてしか存在しない。手の届く現実の課題に取り組む「生き物」と、まづなんとかしてつながることから、本プログラムは取り組み始めた。予測もつかない試みではあったが、その「実践の現場」=足元の共生に取り組む組織・団体=とのつながりの中で、「共生」は何かのゴールとして定められるのではなく、その必要条件/十分条件であり、プログラム関係者がより高い目標を持って生きていくことであり、そのために「つなげること」「意識化させること」「解放すること」「インクルードすること」「トレーディングすること」「事業化すること」など、一人ひとりが何をどう選択し、行動するのかが問われていることが明らかになってきた(大阪大学未来戦略機構第五部門 2015: 36-37)。

本特集のアイデアは、プラクティカルワークの「公共サービス・ラーニング」と「プロジェクト・ラーニング」を担当する特任教員の打ち合わせ時に生まれた。本プログラムは5年目を迎え、プラクティカルワークという授業を通じて学生と私たちは何を学び、そこから何を伝え、今後どのような行動を起こしていけばよいのかを整理する時期を迎えていた。

そこで思い立ったのは、現場で取り組まれている日々の活動や経緯をていねいに言語化し、そこから共生の諸課題に取り組む努力を、知恵を、たくましさを広く伝えることで、お世話になっている諸団体にお返しをしたいというものであった。

2. プラクティカルワーク

未来共生プログラムにおいて、自ら専攻する高度な専門性に加えて、他者に対する深い理解を伴う敬意 (respect) にもとづき、斬新な共生モデルを実施できる知識・技能・態度・行動力を身につけるため、プログラムの核として、プラクティカルワークを位置づけている。

プラクティカルワークは、文字どおり「実践の現場」に出て行くことであり、東北被災地でのコミュニティ・ラーニング(1年次夏季)、関西地域での公共サー

ビス・ラーニング(1年次後期)とそれを基にしたプロジェクト・ラーニング(2年次前期)、海外インターンシップ(3年次後期)、キャリアを想定したフィールド・ラーニング(4年次)など継続的に実施されている。学生たちが、大学外のさまざまな実践の場に出向き、現場を知り、生身の人びとと関わり、信頼関係を築き、課題解決に向けて協働の提案を試みていく体験を、国内外のフィールドで経年的に重ねていくことにより、多文化コンピテンシー(多言語リテラシー、フィールドリテラシー、グローバルリテラシー、調査リテラシー、政策リテラシー、コミュニケーションリテラシー)の獲得を目的としている。

このうち、公共サービス・ラーニングは、1年次後期に学生が週に一回、半年に渡って活動をする。前期はアカデミックな座学が中心で、初めて実際の地域に出向くこととなる。その現場となるのは共生の諸課題に取り組む大阪を中心としたローカルな“足元”である。

受け入れ先は、毎年、どのような共生の課題に取り組む場に行きたいのかという学生の希望をもとにして、学生と教員で探しだす。学生の専攻だけでも多岐にわたるため、その希望先もバラエティに富み、時には見つけれず代替案を提示することもある。もちろん2年目からは前例ができていたので、前年と同じ場を希望する学生もいるが、まさにプログラムが足元の多様な共生の課題と出会う機会ともなっている。

この4年間で、40以上の組織・団体がプログラムの趣旨を理解し、学生を受け入れ育ててくれた。受け入れの組織・団体のおおよそのカテゴリーは学校、公共団体、NPO / NGOに分類することができる。

受け入れの形は様々である。先方には、インターンシップとは違うので、特別にプログラムや仕事をつくらないようにお願いしている。逆に受け入れていただいても全く役に立たないことがあり得ることも断っている。実際、何もできないことで居づらさを感じた学生もいたし、何をしてもらっていいのか困った現場もあった。学生たちはそこでの体験を日報にして教員も含めた他の学生との小グループで分かち合い、様々な問題が生じた場合は相談したり、改善に向けて動いたりしている。また、年度末には自分が活動を通して学んだ成果を、受け入れ団体に発表し、報告書を作成している。

半年間ではあるが、現場に赴き、活動に参加することで、問題意識を共有す

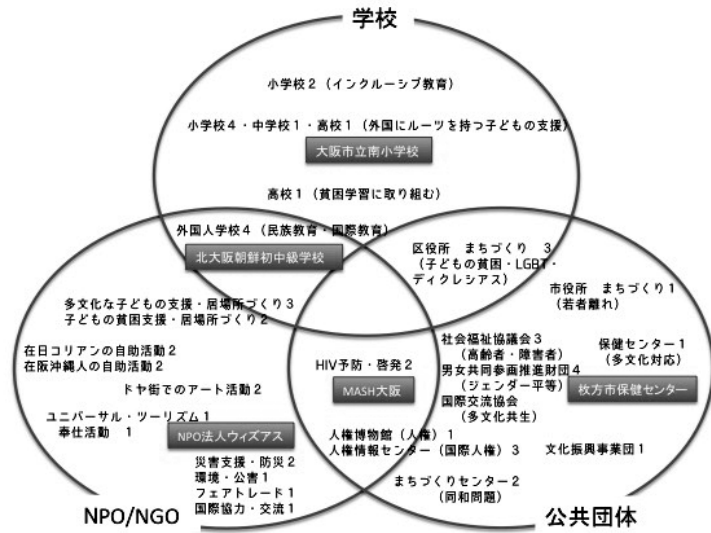


図1. 公共サービス・ラーニング受け入れ組織・団体の分類(2013～16年)

ることができるようになっていく。そのため、翌年度の2年次には、幾つかのチームとなって受け入れ組織・団体にプロジェクトを提案、協働を試みており、この3年間で12のプロジェクトがプロジェクト・ラーニングを通して実施された。

3. 今回取り上げる団体について

今回取り上げる団体は、大阪市立南小学校(2013・2014年度公共サービス・ラーニング)、北大阪朝鮮初中級学校(2013・2016年度公共サービス・ラーニング)、枚方市(2014年度公共サービス・ラーニング、2015年度プロジェクト・ラーニング)、NPO法人ウィズアス(2014年度公共サービス・ラーニング)、MASH大阪(2014・2016年度公共サービス・ラーニング)である。図1に示した通り、カテゴリーの中からなるべく多岐にわたるようピックアップした。

公立学校として、多文化共生の学校・地域づくりに取り組む大阪市立南小学校、一条校ではないが各種学校でありつづけ、民族教育に取り組む北大阪朝鮮初中級学校、地方公共団体で、読み書き教室と連携しながら保健センターでの外国人サービスを試行した枚方市、NPO / NGOとして、障がい者を包摂す

る地域づくりを試み、ユニバーサル・ツーリズムを推進するNPO法人ウィズアス、法人格をもたない、行政・民間・大学の3者でマイノリティのセクシュアルヘルスを向上させようと活動するMASH大阪である。執筆者は、プログラムの特任教員および履修生に呼びかけて募った。各担当者の興味関心をはじめ、これまでの関係性をベースに団体特性や活動内容の多様性を考慮して担当を決めた。

4. 謝辞

本特集では、プログラムを通して関係性をつくることができた団体の取り組みや課題を、このジャーナル誌上に言語化することを試みた。心の中にあっただけでなく、まさに「いま」<ここ>で起きている共生の課題に挑むそれぞれの姿勢から、私たちがいかに深く学び、つながり、行動していくのかを提起したいという思いであった。

しかし、執筆は予想以上に困難を極めた。なぜなら、改めて現場を見聞きする中で、その活動の歴史や現場の方々の行動力、想いに圧倒され、限られた紙面に凝縮することへの抵抗感と、本質を表現しきれないのではないかという不安感に苛まれたからである。しかし、そこを救ってくれたのも、やはり現場の方々であった。何度も会ってお話をうかがい、現場に参加させてもらい、そして素稿を読んでいただき、励ましの言葉までいただいた。ここに心から感謝を申し上げますと共に、共生の課題に取り組む現場が私たちのプログラムを通してつながっていくこと、学生以外の多くの人(このジャーナルを手にとる人も含め)も実践の現場から学んでいただけることを願っている。

最後に、鞍本長利¹の次の言葉を借りて未来共生の現場を伝えたいと思う。

「道があるから、歩いてきたのではありません

歩いてきた跡が道になっていくのです

一日一日を、いっしょうけんめい生きてきたことが今あるのです」

共生への道は、未来へつながる、永続的な日々の活動と挑戦から成ると改めて学ぶ機会であった。私たちも挑戦を続けていきたいと思う。次号においても

本特集の第2弾を企画し、未来共生の現場から引き続き声を届けたいと考える。

注

- 1 NPO法人ウィズアス代表による「ライフディケアの20年とNPO法人ウィズアスの20年のあゆみ」(2012)より。

参考文献

大阪大学未来戦略機構第五部門

2015 『未来共生イノベーター博士課程プログラム 平成24・25年度 年次報告書』

栗本英世

2014 「『未来共生学』創刊にあたって」『未来共生学』1: 3-5。

志水宏吉

2014 「未来共生学の構築に向けて」『未来共生学』1: 27-50。